岩国市諏訪本貝塚出土の貝類について

沖田　絵麻

はじめに

諏訪本貝塚は、岩国市由宇町北 6 丁目に所在する貝塚遺跡である。岩国市からの依頼を受けて、ここから出土した貝資料を調査したので、その内容を報告する。

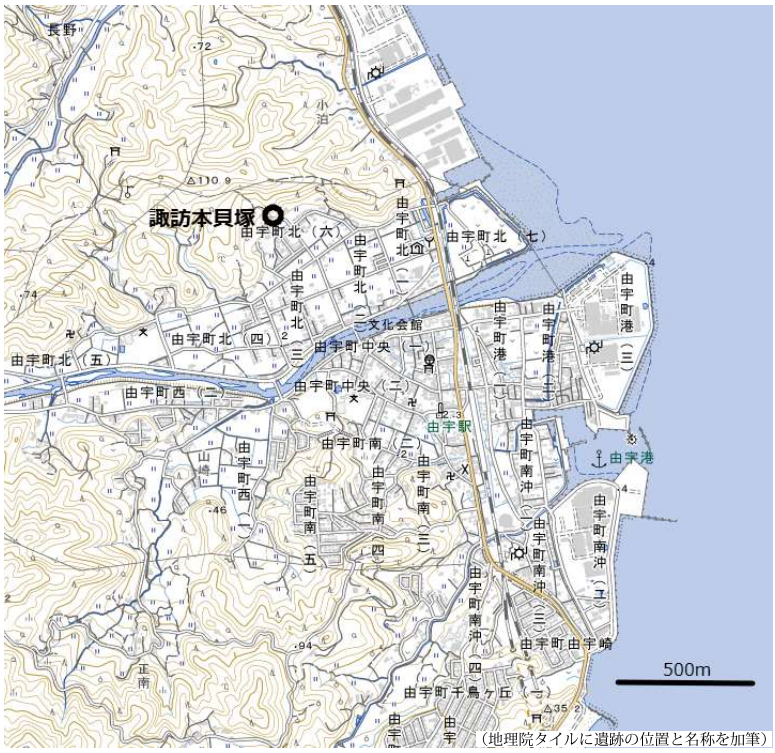
1．諏訪本貝塚について

諏訪本貝塚が所在する旧由宇町域（2006 年に合併）は、岩国市の南東部に位置する。貝塚は、由宇川河口低地の北側の丘陵南縁に立地し（図 1 ）、標高は約 25m である。貝塚から至近の海岸までは、現況で 600m ほどの距離である。

『由宇町史』によれば、貝層（貝殻を含む黒色砂層）は道路の開削時に発見されたが、すでに大半が破壊されており、法面に残ったわずかな貝層（表土下約 30㎝の深さにあり、縦 30㎝×横 80㎝、奥行 25㎝が残っていた）が昭和 38 年に調査された。その調査によって、「アサリ、ハマグリ、シオフキ、アカニシ、マルガイ、カキ、スガイ、バイなど」（松岡 1966）が確認されている。また、貝層からは土製紡錘車が、貝層発見地より約 60m 西の地点からは磨製石斧が出土し、どちらも弥生時代中期頃のものとされる（松岡 1966、藤田 2024）。

2．資料

資料は、諏訪本貝塚から出土した自然遺物 22 点のうち、貝殻 20 点である[1)]。昭和 38 年の由宇町史編纂委員会による調査で出土した資料であり、由宇歴史民俗資料館に保管される。



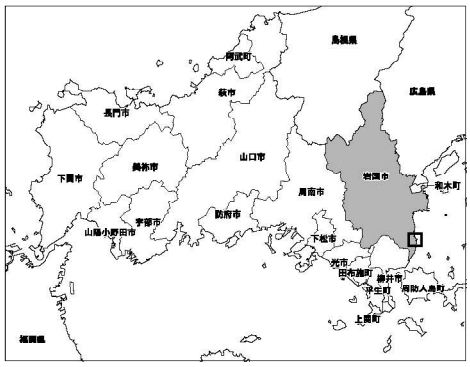


図 1　諏訪本貝塚の位置

表１　出土した貝の種名と生息環境

腹足綱　Gastropoda			
古腹足目 Vetigastropoda	サザエ科 Turbinidae	スガイ *Lunella coronatus coreensis* (Récluz,1853)	潮間帯、岩礁
新生腹足目 Caenogastropoda	タマガイ科 Naticidae	ツメタガイ *Glossaulax didyma* (Röding, 1798)	潮間帯～水深約50m、細砂底
〃	エゾバイ科 Buccinidae	ミガキボラ *Kelletia lischkei* Kuroda,1938	潮間帯～水深約20m、岩礁
〃	アッキガイ科 Muricidae	イボニシ *Reishia clavigera* (Küster,1860)	潮間帯、岩礁
二枚貝綱　Bivalvia			
マルスダレガイ目 Veneroida	マルスダレガイ科 Veneridae	アサリ *Ruditapes philippinarum* (A. Adams & Reeve,1850)	潮間帯中部～水深10m、砂礫泥底
〃	バカガイ科 Mactridae	シオフキ *Mactra veneriformis* Deshayes in Reeve, 1854	潮間帯下部～水深20m、砂泥底

貝殻には、墨書で１～２、４～８、10～22 の番号が記される。半世紀前の出土資料であるが、保存状態は比較的良い。

３．方法

前処理として、竹串や筆を使用し、乾燥状態でクリーニングをおこなった。接合可能なものは、水溶性接着剤により接合復元した。巻貝の内部に詰まった土は掻き出し、篩にかけた。

その後、所有する現生貝の標本と図鑑を参考に、種を同定した。これに並行して、人為的な痕跡等の観察と、ノギスによる計測（図２参照）をおこなった。一部資料の同定には、萩博物館の堀成夫氏の御教示を得た。

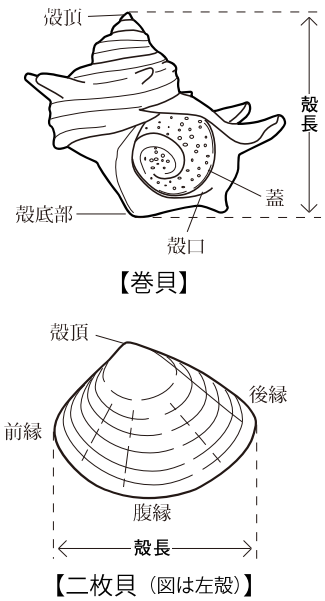


図２　貝の部位と計測箇所

４．結果

表１に示すように、腹足綱（巻貝の仲間）４種と二枚貝綱２種を同定した。いずれも採集が容易で、現在でも食用とされる貝である。

資料番号ごとの同定結果を表２に示す。スガイは、No.12+20 のツメタガイの中に詰まった土から見つかったため、番号がない。№ 19 のイボニシは、黒住（2021）が「細型（ナガイボニシ）」とする、瀬戸内海でみられる型である。

残存部位から算出される最小個体数は、スガイ１、ツメタガイ３、ミガキボラ１、イボニシ１、アサリ６、シオフキ１である。

ツメタガイ、ミガキボラ、イボニシ、アサリには、焼けた痕跡が認められる。焼けた貝は灰色～黒色に変色し、殻表面に被熱による弾けや亀裂がみられるものもある。

サイズについては、イボニシ（№ 19）の殻長は 43.3㎜、アサリ左殻３点（№ 2、6、17）の殻長平均は 37.8㎜、シオフキ（№ 4）の殻長は 49.0㎜である。

表 2　出土した貝の残存部位・数・計測値

No.	分類		部位	L/R	部分	被熱	色調	備考
1	二枚貝綱	アサリ	殻体	R	略完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
2	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
4	二枚貝綱	シオフキ	殻体	R	略完全	無	○	
5	腹足綱	ミガキボラ	殻体	-	殻体～殻底	有	●	被熱による弾けや割れあり
6	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
7	二枚貝綱	アサリ	殻体	R	殻体 後半部	有	▲	
8	二枚貝綱	アサリ	殻体	R	完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
10	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	完全	無	○	
11	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	完全	無	○	
12・20	腹足綱	ツメタガイ	殻体	-	略完全	無	○	№12と20が接合
13	腹足綱	ツメタガイ	殻体	-	略完全	有	▲	黒色帯あり
14	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	殻体	有？	▲	破片
15	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	殻体 後半部	有	▲	
16	二枚貝綱	アサリ	殻体	R	略完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
17	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
18	腹足綱	ツメタガイ	殻体	-	略完全	有	▲	黒色帯あり
19	腹足綱	イボニシ	殻体	-	完全	無	○	黒住(2021)の細型（ナガイボニシ）
21	二枚貝綱	アサリ	殻体	R	略完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
22	二枚貝綱	アサリ	殻体	L	略完全	有	▲	被熱による弾けや割れあり
なし	腹足綱	スガイ	蓋	-	完全	無	○	№20ツメタガイの中の土から検出

色調〔○：白色、●：黒～灰色、▲：一部黒～灰色〕

5．考察

今回調査した貝類は、わずかに残された貝層から採取された貝殻であるため、貝層の全体に対する割合は不明である。数が少ないため、調査された貝層から得られた貝資料の全てではないと思われるが、どのような基準で採取されたのか不明である。ただ、ある程度の大きさで、比較的完全な形状の貝殻が多いため、そうした貝を選んで採取した可能性が高いのではないだろうか。そうであれば、サイズや種類に偏りが生じていると想定されるため、この貝資料をもって諏訪本貝塚の貝相を語ることは避けたい。

今回報告した貝類からは、諏訪本貝塚を残した人々の貝採取場所には岩礁、砂質海岸、砂泥質干潟が含まれていたことが想定される。『由宇町史』には、諏訪本貝塚の目前に広がる由宇川の河口低地について、「かつてこの低地は、慈雲院あたりまでも海が深く入り込み、由宇川も北寄りに蛇行して流路をとっていたと伝えられている」（松岡 1966）と書かれている。由宇町北 5 丁目に所在する臨済宗慈雲院は、現在の河口から約 1.5㎞内陸に位置する。そこまで海が入っていた時期には、諏訪本貝塚の目前には河口干潟が広がっていた可能性がある。こうした環境には多種の貝類が棲息しているため、それを潮干狩りのような方法で採取・利用した人々が、当地に貝塚を残したことは十分想定できる。

だたし、今回調査した貝類には、河口干潟に棲息するヤマトシジミやハマグリ、マガキ等が見られなかった。昭和 38 年の調査で確認された貝の種類は「アサリ、ハマグリ、シオフキ、アカニシ、マルガイ、カキ、スガイ、バイなど」（松岡 1966）とあるため、貝層中にはハマグリやマガキが含ま

れていたのであろう。したがって、諏訪本貝塚を残した人々の主な貝採取場所の一つには、由宇川河口部を想定することができる。さらに、岩礁や砂質海岸でも貝採集をおこなっているはずであるが、それらは若干離れた場所の可能性がある。近年の埋め立てや護岸により、海岸の環境は弥生時代から大きく変化していると思われるため、その特定は難しいかも知れない。

諏訪本貝塚出土貝類の特徴として、焼けたものが多いことも挙げられる。同種の貝殻でも、焼けたものと焼けていないものが存在するため、特定の貝を焼いたということは無かったようである。調理のために殻ごと焼く場合はあったであろうが、殻の内側まで灰色になったアサリや、全体が灰色～黒色を呈する№ 5 のミガキボラについては、単なる調理の焼け方を超えているのではないかと思われる。現状では断片的な情報しかないため、貝殻を焼いた目的の検討については今後の課題としたい。

おわりに

今回、貝の中に詰まった土からスガイの蓋が発見されたことから、発掘調査においてサイズの小さな資料は取りこぼされている可能性が指摘できる。貝層はアルカリ性の環境になるため、同所に骨が捨てられていれば、それも良く保存される場合が多い。小さな貝や骨も採集できれば、得られる情報の量が飛躍的に増える。ただし、小さな貝や骨片を目視で採集することは難しいため、貝層を持ち帰りフルイがけする環境考古学的な方法をとる必要がある。由宇町域の貝塚についても、今後そのような方法での調査が望まれる。

諏訪本貝塚からは土製紡錘車や石斧が出土しており、人々の生活拠点となる集落が付近に存在した可能性が高いが、その存在は明らかになっておらず、情報が乏しい遺跡である。貝層の貝殻は人々が残した食糧残滓であり、当時の生活を具体的に知ることのできる資料として貴重である。地域の歴史を示す資料として保管・活用されることを願う。

同定に助言をいただいた萩博物館の堀成夫氏、諏訪本貝塚出土貝類調査の機会と関連文献を提供いただいた岩国市文化財課に感謝申し上げます。

[1)]貝のほかに、石灰質の鉱物のようなものが 2 点含まれていた。これらに資料番号の 3 と 9 がふられている。貝ではないため、本報告の対象からは除外した。

引用・参考文献

奥谷 喬司編著　2017『日本近海産貝類図鑑（第二版）』東海大学出版部
黒住耐二　2021『くらべてわかる貝殻』山と渓谷社
福田 宏・増野和幸・杉村智幸　1992 『概説　山口県の貝類』山口県立山口博物館
藤田慎一　2024「由宇歴史民俗資料館蔵の考古資料 (1)　－弥生時代遺物について－」『山口考古』第 44 号 :pp.89-94
逸見泰久ほか　2012 『干潟の絶滅危惧動物図鑑　海岸ベントスのレッドデータブック』日本ベントス学会編、東海大学出版会
松岡利夫　1966『由宇町史』由宇町史編纂委員会：pp.57-67

スガイ蓋（No.なし）

ツメタガイ（No. 13・No. 18）

ツメタガイ（No. 12+20）

イボニシ（No. 19）

ミガキボラ（No. 5）

シオフキ（No. 4）

アサリ
上段：左殻（左から、No. 22・No. 2・No. 17・No. 6）
下段：右殻（左から、No. 1・No. 8・No. 21・No. 16）

No.○は資料番号（表２と共通）

写真　諏訪本貝塚出土貝類